

# 叡智知識が中国高齢者の死に対する態度に及ぼす影響

——主観的幸福感の媒介効果の検討——

黎 子 銘

(立命館大学大学院人間科学研究科／博士課程前期課程)

本研究は以下の仮説を検証した。1) 中国高齢者の死に対する態度は叡智知識、および主観的幸福感と関連性がある。2) 主観的幸福感は叡智知識から死に対する態度へのパスの中に、媒介効果がある。中国広東省在住の高齢者 139 名を対象者とし、死に対する態度、叡智知識、主観的幸福感に関する質問を含んだアンケート調査を実施した。まず、因子分析の結果として、中国高齢者は死に対する態度において、日本高齢者とはほぼ同じの因子構造を示した。次に、重回帰分析の結果、叡智知識は「死後の生活の存在への信念」と「人生に対して死が持つ意味」の規定要因であると示唆された。主観的幸福感「手続き的知識」から「人生に対して死が持つ意味」を規定するパスにおいて 10% 水準の媒介効果を示した。以上の結果から、仮説 1 は部分的に支持された。叡智知識は「人生に対して死が持つ意味」と「死後の生活の存在への信念」と関わっているが、「死に対する恐怖」、「生を全うさせる意志」、および「身体と精神の死」とは関わらないと分かった。そして、主観的幸福感の媒介効果は「手続き的知識—希望感—人生に対して死が持つ意味」のみ確認されたことで、仮説 2 も部分的に支持された。

キーワード：死に対する態度、叡智、主観的幸福感、中国高齢者

立命館人間科学研究, No.46, 31-45, 2023.

## 1. はじめに

### 1.1 中国社会における死生観問題

死に関する話題を回避する傾向が中国には普遍的なこととなっている。一つの理由として、衛生環境の改善と医療技術の進歩があげられる。中国国家統計局 (2019) の調査によれば、中国人の平均寿命は 1990 年の 68.55 歳から 2018 年の 77 歳に伸びたことが分かる。こうして、現代の社会は「長生き」を追求する一方、「死」を見ないことにしている。

一般的に、死に対する意識は加齢と共に顕現化していく。例えば若者は自分の死に対するリアリティが比較的希薄であり (隈部, 2006),

高齢者は「死」の問題を身近な「死」を通して受け入れ、それに対処をしている (河村・中里, 2016; 丹下ら, 2016)。しかし、中国において、死に関する話題が不吉だと見なされ、タブー視されているため、中国の高齢者自身の「死」について考える機会が乏しいことが示唆されている (稲木・張, 2017)。

このような社会背景の中、中国の高齢者を対象にした死の問題の研究が数少ない一方、研究の焦点はほとんど死への恐怖や不安にある。しかし、中国は古い時代から人民による革命が多い国であり、国のための死に対して、ほとんどの人は敬意を持っている。そのため、死に対する恐怖に注目するだけでは、中国高齢者の死に対する態度を把握するにはまだ不十分だと考え

られる。

欧米では、死に関する検討は宗教と医療現場の視点にと止まらず、死の教育 (Death Education) の実践を通して、若者のメンタルヘルスを改善することもある。中国で死の教育実践を展開するには、中国人はどのような死生観を持っているかを把握することが重要な課題になる。

## 1.2 死生観、死観、死に対する態度

死生観とは、文字どおり、生きることと死ぬことに対する見方である。死生観は死生学において重要なテーマであり、多くの研究者に検討されている。欧米においてよく使われる概念は「死に対する態度 (Attitude toward Death)」である。「死に対する態度」は操作的定義によって、日常でよく耳にする「死生観」と同義する場合と、「生」の部分を除いて、「死」部分のみ考える「死観」と同義する場合がある。同じ「死に対する態度」でも、死生観を指すか、死観を指すかは使われる尺度次第である。

例えば、隈部 (2006) が Death Attitude Profile-Revised (DAP-R) (Wong et al., 1994) によって作成した DAP-R 日本語版は死に対する態度を (1) 接近型受容, (2) 死の恐怖, (3) 死の回避, (4) 逃避型受容, という 4 つの下位因子に分けている。その中の, (1) 接近型受容は「死」を素晴らしい始まりへの道として捉えることを表している。(4) 逃避型受容は「死」を生きる苦しみから解放してくれるものとして捉えることを表している。内容的には「死」そのものに注目しているため、死生観よりも、死観を測定していると考えられる。

一方で、丹下 (1999) は青年期の死に対する態度を (1) 死に対する恐怖, (2) 生を全うさせる意志, (3) 人生に対して死が持つ意味, (4) 死の軽視, (5) 死後の生活の存在への信念, (6) 身体と精神の死, という 6 つの下位因子に分けている。その中の, (1) 死に対する恐怖は、存

在の消滅や死の未知性、未完の終結などへの恐怖を表している。(2) 生を全うさせる意志は、自殺の否定および状況は問わず「生」自体が目的であるとする意志を表している。(3) 人生に対して死が持つ意味は、死が人生に肯定的な作用を持つという考え方を表している。(4) 死の軽視は、死は他人事や苦難からの解放だと見なす考え方を表している。(5) 死後の生活の存在への信念は、靈魂永続性を信じるか否かを表している。(6) 身体と精神の死は、身体の生より心の死を重視する考え方を表している。さらに、成人期と高齢期の死に対する態度は青年期の死に対する態度と比べて、(4) 死の軽視がなくなり、この側面が成人にとって死に対する態度の中で一つの側面として認識されていない可能性が示唆されている (丹下・西田・富田・安藤・下方, 2013)。

丹下 (1999) の死に対する態度尺度が「死」そのものだけではなく、「死」を展望することから「生」に対する見方も含まれている。そのため、DAP-R 日本語版 (隈部, 2006) と比べ、丹下 (1999) の死に対する態度尺度はより適切に「死生観」を測定していると言える。また、本研究が使用する丹下ほか (2013) の尺度は高齢者を対象にするために、丹下 (1999) の死に対する態度尺度から修正したものである。死に対する見方が測られる上で、生きていく意志も測られる点では本研究の「死に対する態度」と「死生観」はほぼ同義だと言える。

## 1.3 叡智と死に対する態度

叡智は「wisdom」の訳語であり、他にも「英知」、「知恵」など、研究者によってそれぞれ訳されている。Baltes & Staudinger (2000) は wisdom を「人生の行動と意味に関する専門知識」と定義している。さらに、wisdom を評価する 5 つの基準を提唱した。5 つの基準は大まかに基礎基準とメタ基準の 2 つに分かれる。基礎基準に

は事実知識（人間の状態と本質を知ること）、手続き的知識（人生の問題を解決するための方略）がある。メタ基準には文脈主義（生活の環境や社会の状況およびその発展に関する知識）、価値観の相対主義（文化の違いを認識し、異なる価値観に対する配慮と敏感さがあること）および、不確定性に対する認知とマネジメント（知識の限界を知り、未来の不確実性を理解すること）がある。楠見（2018）では、熟達化を通して獲得される知識を、叡智の土台として注目し、叡智の5基準を基に叡智知識尺（Wisdom Knowledge Scale:WKS）を開発した。一方で、春日・佐藤・Takahashi（2018）は wisdom に関する定義を整理したところ、「知恵」と「叡智」が必ずしも同義ではないと考え、叡智を「優れた知恵」とし、知恵の下位概念として位置づけた。また、知恵は問題に取り組む際の機能（機能的側面）と認知・内省・感情といった心理構造（構造的側面）から取り入れることが提案された（春日・佐藤・Takahashi, 2018）。この点を踏まえ、楠見（2018）が定義した叡智は知恵の機能的側面に当たると考えられる。

死の問題は高齢者が直面しなければいけない問題であり、実際に死の問題に直面する際に、高齢者がいかに自身の知識や経験を生かし、解決していくかは重要な課題になると考えられる。死へのアプローチに関して、欧米において死の教育が提唱され、様々な実践的教育が行なわれている。しかし、中国において、「死の教育」という概念はいまだに普及していない。つまり、中国の高齢者は自身の経験に基づき、死の問題に立ち向かうしかないと考えられる。従って、中国高齢者が持つ人生の知識や経験、ないし叡智は中国高齢者の死に対する態度に影響を及ぼす可能性が考えられる。

しかし、従来の研究において、wisdom と死に対する多側面的な態度の関連性に関する検討は数少ない。Ardelt（2008）は高齢者の wisdom

は死への恐怖と死への回避との間に負の関連があると示唆している。Brudek & Sekowski（2020）は宗教性が死に対する態度に及ぼす影響において、wisdom の媒介効果を報告している。いずれの研究も死への恐怖や死への回避に焦点を置いた研究であった。一方で、死生観の「生」の側面に注目すると、事故による死別を経験した高齢者は死の不確実性を理解し、死が訪れる前に人生をしっかり全うさせる意志が強まることも考えられる。このように、死別を多く経験した高齢者は死別と悲嘆から死に関する問題を解決するための経験や知識を獲得し、その知識は高齢者の死生観を表していると考えられる。本研究は日常生活から得られる人生に関する知識と死生観との関係性を検討するために、wisdom 中の日常生活の問題解決に関わる叡智知識に注目する。

#### 1.4 主観的幸福感と死に対する態度

生活の質（Quality of Life；以下はQOLと略称する）という概念があるように、人の死に関して、死の質（Quality of Death；以下はQODと略称する）という概念も提唱されている（野尻, 2015）。野尻（2015）は「満足な生」、「幸せな生」など高いQOLが「満足な死」、「幸せな死」につながると考え、高齢者のQODを高めるにはQOLを高めることが必要だと示唆している。

QOLと類似する概念として、主観的幸福感（subjective well-being）があげられる。主観的幸福感とは感情的経験、家族、仕事など領域別における満足感と人生全般に対する満足観を含む概念である（Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999）。幸福感和死の関連性について、近年、Gerstorf（2008, 2014, 2016）は終末期になると幸福感が激減する現象がしばしばあることを報告している。Feng et al.（2021）は死への不安が低い人が、高い精神的健康水準を持っていると示唆している。このように、死ぬことに対する見方は幸福感到に影

響を与える可能性がある。

しかし、日常生活において、人が健康で幸せなとき、死の存在を無自覚に無視してしまうことから、幸福感が死に対する態度の形成に影響を及ぼすことも考えられる。まず、橋本・子安(2011)は、主観的幸福感はポジティブ志向と正の関連があると示唆している。そして、ポジティブ感情が報酬を過大評価し、リスクを過小評価するという指摘(Schwarz & Bohner, 1996)から、幸福感が高い人は死がもたらすリスクを過小評価し、死に対する態度がポジティブになる可能性が考えられる。

### 1.5 本研究の位置づけと目的

本研究は中国人の死生観に関する基礎研究と位置付けられる。人為的介入(死の教育など)がないときの死生観形成の規定要因を明らかにすることが目的である。本研究では日常生活から熟達する叡智知識、主観的幸福感、および死に対する態度尺度の関連性をモデルで検討する。また、幸福感は上述の叡智知識から影響を受けている(楠見, 2018)ことから、主観的幸福感は叡智知識と死に対する態度の間に媒介効果として存在すると推測できる。なお、高齢期は若年期と比べ、人生経験がもっとも豊富な時期であるため、叡智知識を調べる対象者として最適だと考えられる。

本研究は、以下の仮説を立てる。1) 中国高齢者の死に対する態度は叡智知識、および主観的幸福感と関連性がある。2) 主観的幸福感は叡智知識から死に対する態度へのパスの中に、媒介効果がある。以上の仮説を踏まえ、中国高齢者の叡智知識と死に対する態度の構造モデルを検討する。

## 2. 方法

### 2.1 研究参加者

60歳以上の中国広東省在住の高齢者139名であった。その中に、男性60名、女性79名、平均年齢68.2歳(60~87歳,  $SD=7.01$ )であった。なお、高齢者の定義に関して、心理学では65歳以上の人とされているが、中国では60歳以上の人が高齢者であると関連する法律によって定められている。したがって本研究では高齢者の境を60歳以上と設定した。

参加者のリクルートは通信ソフト Wechat を通して、60歳以上の高齢者や同居人に調査への協力をお願いした。協力を承諾した参加者に Web アンケートのリンクを送信した。調査の時間は2020年4月中旬から5月上旬であった。

### 2.2 測定尺度

死に対する態度：丹下ほか(2013)が開発した高齢者に適用可能な死に対する態度尺度(Attitude toward Death Scale for Adult; ATDS-A)を用いた。中国の時代背景を考えると、現在の高齢者の中に、文字が読めない方が多くいる。一方で、近年の経済発展により、テレビが普及している。文字の読み書きができない高齢者でも、テレビの音声を通して情報を獲得することができる。したがって、「本に出てくる死の場面で、私は死に関する考えを深めた」という項目を「本、テレビやニュースに出てくる死の場面で、私は死に関する考えを深めた」に拡張した。測定方法は「私は死が怖い」、「死後の世界がある」などの25項目から成る。評定は「全くそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」の5件法であった。また、死生観を測る尺度として、平井(2000)が開発した「死生観尺度」もあげられる。平井ほか(2000)の尺度と丹下(1999)の尺度は内容上に非常に似ている。さらに、丹下ほか(2013)は丹下(1999)の尺度を高齢者

への適用性を検証した。本研究では、高齢者の死生観を測ることが目的であり、目的に従い、丹下ほか（2013）の中高齢者に適用可能な死に対する態度尺度を使用する。

叡智知識：楠見（2018）が開発した叡智知識尺度（WKS）を使用した。「人生で起こる重要な出来事に関する知識」などの人生における様々な問題を解決するために必要な知識や方法に関する質問、計12項目であった。身につけている程度を5段階：初級レベル（未熟で、失敗が多い、まわりからの手助けが必要）、一人前レベル（慣れたことは一通り自分で解決できる）、中級レベル（慣れないことでも自分で解決できる）、上級レベル（難問を解決できる。適切なアドバイスをできる）、達人レベル（深い理解によって、難問に対してすぐれた解決やアドバイスができる）で参加者自らの評定を求めた。下位尺度は「事実知識」、「手続き的知識」、「文脈知識」、「相対主義」、「不確定性」があった。

主観的幸福感：伊藤ら（2003）が開発した主観的幸福感尺度を使用した。尺度は主観的幸福感を多次元で捉えるほか、過去を振りかえり、未来を展望する時間的展望の要素も含まれているため、死生観の検討に適合性がよいと考えられる。項目は「あなたは人生が面白いと思いますか」などの質問、計15項目に対し、「非常に...（4点）」から「全く...ない（1点）」の4件法で評定した。下位尺度は「人生に対する前向きな気持ち（満足感）」（以下は「満足感」と略称する）、「自信」、「達成感」、「人生に対する失望感」、「至福感」があった。その中に、「人生に対する失望感」の項目（「自分の人生には意味がないと感じていますか」など）が全て反転項目であるため、「人生に対する希望感」（以下は「希望感」と略称する）と呼ぶことが妥当だと考える。

以上の測定項目はすべて筆者が中国語に翻訳した。翻訳の内容的妥当性に関して、まずは筆者以外の心理学部の中国人留学生1名が翻訳の

内容が元の内容と一致することを確認した。次に、他学部の中国人留学生1名が心理学専門以外の人でも内容が分かりやすいかどうかを検討した。

## 2.3 分析方法

データの集計、整理、および逆転項目の逆転処理はExcel 2021を用いた。分析について、SPSSバージョン27を用いて、因子分析と重回帰分析を行った。Rバージョン4.0.2を用いて、共分散構造分析を行った。

## 2.4 倫理的配慮

本研究は人の死に対する態度に関する研究であるため、質問紙の回答により死への不安が喚起される可能性があると考えられる。そのため、質問紙のタイトルと説明文に本研究は死に関する話題を扱うことを強調し、質問紙のURLを配布する前に参加者の方々に本研究の内容と目的を偽りなく説明した。また、本研究への協力はあくまで任意的であり、いかなる理由で協力拒否または中止の権利が保障されることも質問紙調査の前に説明した。なお、本研究は指導教員の指導及びヘルシンキ宣言の下で行った。

## 3. 結果

### 3.1 中国高齢者の死に対する態度の構成

ATDS-Aの25項目に対して、最尤法とスクリーテスト（永吉, 2016:291-292）により5因子を抽出し、プロマックス回転を施す因子分析を行なった（表1）。因子負荷量が0.34未満の基準に基づき、「本、テレビやニュースに出てくる死の場面で、私は死に関する考えを深めた」、「私が死ぬと家族や友人を悲しませてしまうのが辛い」、「『死』があるからこそ人は精一杯『生きる』のだ」の3項目を除外した。次に、残った22項目を再分析し、さらに因子負荷量が0.34未満の4

表 1. 死に対する態度の因子分析結果 (N=139)

	F1	F2	F3	F4
<b>F1: 死に対する恐怖</b>				
4、死んだ後、何が起るかかわからないので不安だ	<b>0.861</b>	0.079	-0.178	0.054
2、自分が消滅してしまうと思うと恐ろしい	<b>0.722</b>	-0.226	0.000	-0.039
6、死ぬといかなる体験も出来なくなるのが嫌だ	<b>0.740</b>	0.153	-0.092	-0.098
10、私は死が怖い	<b>0.690</b>	-0.226	0.104	0.117
15、自分の死を想像すると嫌な気分になる	<b>0.606</b>	-0.081	0.096	-0.144
17、死ぬと人々に忘れられるのが嫌だ	<b>0.605</b>	0.187	0.140	0.103
19、人が死ぬと、自分の死について考えさせられるのが嫌だ	<b>0.486</b>	0.175	-0.028	0.116
<b>F2: 死後の生活の存在への信念</b>				
22、人は死んでもまた別の人として生まれ変わる	-0.037	<b>0.899</b>	0.030	-0.086
5、人が死んでも魂は残る	0.069	<b>0.693</b>	-0.002	-0.096
21、死後の世界はある	0.136	<b>0.651</b>	-0.055	-0.011
12、死んだ後、人はすばらしい場所へ行く	-0.137	<b>0.574</b>	0.147	0.038
<b>F3: 生を全うさせる意志</b>				
8、自殺はしてはいけない	-0.041	0.066	<b>0.701</b>	0.070
9、私は不治の病になっても自殺はせずに最後まで生きる	-0.183	-0.009	<b>0.659</b>	0.036
23、後に残される人の気持ちを考えると自殺はできない	0.029	-0.021	<b>0.570</b>	0.155
24、命より大事なものは無い	0.022	0.040	<b>0.494</b>	-0.301
<b>F4: 人生に対して死が持つ意味</b>				
16、死は人間の進化の一端を担っている	0.099	-0.158	0.107	<b>0.788</b>
1、「死」は「生」を意味付けるものだ	-0.126	-0.050	-0.020	<b>0.625</b>
14、死について考えることは人を成長させる	-0.039	0.236	0.006	<b>0.430</b>
因子寄予率	0.187	0.130	0.090	0.078
累積因子寄予率	0.187	0.316	0.406	0.484
因子間相関	F2	-0.14		
	F3	0.22	-0.25	
	F4	-0.24	-0.32	0.02

項目（「自分が存在しなくなるのは嫌だ」、「治る見込みのない病気ならば「安楽死」も権利として認めるべきだ」、「私はたとえ脳死状態でも生き続けたい」）を除外した。しかし、第5因子の項目数は1項目しかないので、4因子で因子モデルを再検討した。因子モデルを比較したところ、5因子19項目が有意ではなかったことに対して、4因子19項目が1%有意水準に達した。しかし、元第5因子の項目はどの因子に対する

因子負荷量も低かった。4因子18項目の有意水準が4因子19項目より少し劣っているが、10%有意水準に達し、因子負荷量が低い項目もなかった。したがって、4因子18項目を採用した。第5因子を除いて、因子の数と構造は先行研究と相似している。そのため、先行研究と同じく、第1因子を「死に対する恐怖」（得点が高いほど死を恐れる）、第2因子を「死後の生活の存在への信念」（得点が高いほど死後の生活があると信

じる), 第3因子を「生を全うさせる意志」(得点が高いほど生き続けたがる), 第4因子を「人生に対して死が持つ意味」(得点が高いほど死に意味があると考える)。

### 3.2 記述統計

表2は各下位尺度の記述統計である。死に対する態度の下位尺度得点は傾向を見るため, 各項目の点数を足し算し, 項目数で割ったものであった。叡智知識の下位尺度と主観的幸福感の下位尺度の得点は各項目の点数を足したものであった。死に対する態度に関して, 「死に対する

恐怖」, 「死後の生活の存在への信念」は「人生に対して死が持つ意味」基準得点と近い ( $\pm 0.5$  未満) 平均得点を示した。「生を全うさせる意志」は基準得点より高い平均得点を示した。叡智知識に関して, 上級者以上比率が6.5%から17.3%であり, 「事実知識」の上級者以上比率が比較的に低いと示した。主観的幸福感に関して, 「満足感」の平均得点が10.35で, 最も高かった。「達成感」と「希望感」の平均得点が9以下であり, 比較的に低い水準であった。

表2 各下位尺度の平均値

		全体(N=139)	
死に対する態度			基準得点
死に対する恐怖	3.05 (0.79)		3
死後の生活の存在への信念	2.78 (0.85)		3
生を全うさせる意志	4.03 (0.66)		3
人生に対して死が持つ意味	3.28 (0.80)		3
叡智知識			上級者以上比率
事実知識	4.25 (1.79)		6.5%~7.2%
手続き的知識	9.37 (3.48)		7.9%~14.4%
文脈知識	4.6 (1.9)		7.9%~14.4%
相対主義	4.89 (1.93)		12.2%~17.3%
不確定性	4.71 (2.13)		12%~15.1%
主観的幸福感			範囲
満足感	10.35 (1.42)		3~12
自信	9.71 (1.45)		3~12
達成感	8.92 (1.52)		3~12
希望感	8.74 (1.94)		3~12
至福感	9.15 (1.67)		3~12

注) カッコの中の数値は標準偏差である。

死に対する態度尺度の基準得点はすべての項目を“どちらでもない”を選択した場合の得点である。叡智知識尺度の上級者以上比率は該当下位尺度の各項目の上級者以上比率の範囲である。

### 3.3 死に対する態度の規定要因

1回目の分析は死に対する態度の各下位尺度を目的変数とし、叡智知識の各下位尺度を説明変数として投入し、重回帰分析を行った。また、統制変数として、年齢と性別を投入した。2回目の分析では、1回目の分析の上で、主観的幸福感を媒介変数として投入し、重回帰分析を行った。「生を全うさせる意志」は有意なモデルが得

られなかった。

死後の世界の存在への信念（表3）に関して、モデル1では、「事実知識」が有意な正の係数（ $B = .150, p < .05$ ）があり、「手続き的知識」が有意な負の係数（ $B = -.107, p < .01$ ）があることが確認できた。統制変数としての男性ダミー有意な負の係数（ $B = -.311, p < .05$ ）があった。モデル2では「事実知識」（ $B = .142, p < .05$ ）と「手続

表3. 死に対する態度の規定要因

	死後の生活の存在への信念		人生に対して死が持つ意味	
	モデル1 <i>B</i>	モデル2 <i>B</i>	モデル1 <i>B</i>	モデル2 <i>B</i>
切片	2.255 **	2.447 **	3.131 ***	2.339 **
年齢	0.009	0.005	-0.004	-0.008
男性ダミー(男性:1, 女性:0)	-0.311 *	-0.283	-0.106	-0.044
<b>叡智知識</b>				
事実知識	0.150 *	0.142 *	-0.002	-0.013
手続き的知識	-0.107 **	-0.106 *	-0.084 *	-0.071
文脈知識	-0.075	-0.073	-0.021	-0.030
相対主義	0.086	0.097	0.167 *	0.178 **
不確定性	0.071	0.068	0.119 *	0.088
<b>主観的幸福感</b>				
満足感	-	-0.01	-	0.004
自信	-	-0.065	-	0.037
達成感	-	0.019	-	0.096
希望感	-	-0.033	-	-0.095 *
至福感	-	0.095	-	0.069
調整済み $R^2$	.064	.060	.111	.141
<i>F</i> 値	2.348 *	1.730	3.452 **	2.891 ***

$N=139$ . \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

注) すべての項目の VIF が 5 以下である。



きの知識」( $B = -.106, p < .05$ )はモデル1と同じように有意な係数があったが、いずれも若干弱まったことが分かる。一方で、モデル1は有意であった ( $F = 2.348, p < .05$ )が、モデル2は有意ではなかった ( $F = 1.730, n.s.$ )。

「人生に対して死が持つ意味」(表3)に関して、モデル1では「手続き的知識」が有意な負の係数 ( $B = -.084, p < .05$ )があり、「相対主義」( $B = .167, p < .01$ )と「不確定性」( $B = .119, p < .05$ )が有意な正の係数があることが示している。モデル2では、「相対主義」が有意な正の係数 ( $B = .178, p < .01$ )があったが、「手続き的知識」と「不確定性」の係数が有意ではなくなった。また、主観的幸福感の中の「希望感」が有意な負の係数 ( $B = -.095, p < .05$ )があることを示している。モデル1 ( $F = 3.452, p < .01$ )とモデル2 ( $F = 2.891, p < .001$ )が有意であった。

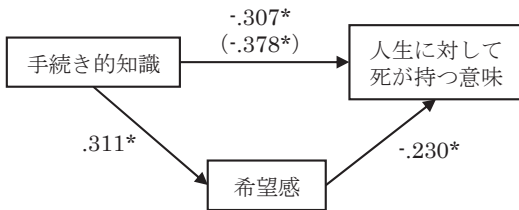
### 3.4 主観的幸福感の媒介分析

重回帰分析の結果(表3)、「人生に対して死が持つ意味」の規定要因において、主観的幸福感をモデル2に投入することによって、「手続き的知識」と「不確定性」の偏回帰係数が小さくなった。また、モデル2では「希望感」が有意な結果を示した。これによって、「手続き的知識—希

望感—人生に対して死が持つ意味」、「不確定性—希望感—人生に対して死が持つ意味」という2つの媒介効果が存在すると考えられる。これらの媒介効果をより明瞭に捉えるために、SEMによる推定を行った。

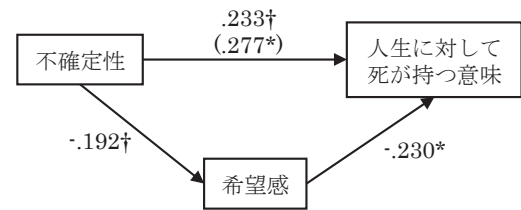
図1では「手続き的知識」から「希望感」に向けるパス係数が有意( $\beta = .174, p < .05$ )であり、希望感から「人生に対して死が持つ意味」に向けるパス係数も有意( $\beta = -.284, p < .05$ )であった。「希望感」を媒介した「手続き的知識」から「人生に対して死が持つ意味」への媒介効果について、媒介変数を投入する前( $\beta = -.261, p < .05$ )と比べ、投入後の効果( $\beta = -.212, p < .05$ )が弱まった。つまり、媒介効果が確認したが、完全媒介ではなく部分媒介であった。ソベル検定を行った結果、10%水準の有意傾向を示した。

図2では「不確定性」から「希望感」に向けるパス係数( $\beta = .175$ )が10%水準の有意傾向があり、「希望感」から「人生に対して死が持つ意味」に向けるパス係数も有意( $\beta = -.284, p < .05$ )であった。「希望感」を媒介した「不確定性」から「人生に対して死が持つ意味」への媒介効果について、媒介変数を投入する前( $\beta = 3.12, p < .05$ )と比べ、投入後の効果( $\beta = .263, p < .1$ )が弱まった。しかし、「不確定性」から「希



間接効果(手続き的知識→希望→死が持つ意味):  $-.049\ddagger$

図1 SEMによる推定結果(1)



間接効果(手続き的知識→希望→死が持つ意味):  $0.05$

図2 SEMによる推定結果(2)

$N = 139$

\*  $p < .05$ , †  $p < .1$

注1) 飽和モデル ( $CFI = 1.000, RMSEA = 0.000$ )で推定。値は標準化推定値。

注2) ()内は媒介変数を投入しない場合の直接効果を示す。

注3) 誤差は省略する。

$N = 139$

\*  $p < .05$ , †  $p < .1$

注1) 飽和モデル ( $CFI = 1.000, RMSEA = 0.000$ )で推定。値は標準化推定値。

注2) ()内は媒介変数を投入しない場合の直接効果を示す。

注3) 誤差は省略する。

望感」へのパスは有意ではないため、媒介効果があるとは言い難い。なお、ソベル検定を行った結果、有意な結果を示さなかった。

#### 4. 考察

##### 4.1 中国高齢者の死に対する態度と叡智知識

本研究はまず、中国の高齢者の死に対する態度、叡智知識、および主観的幸福感を調査し、各下位尺度の平均値をまとめた。

死に対する態度において、中国高齢者がどのような傾向があるかを検討するため、死に対する態度に関したすべての項目が“どちらでもない”を選択した場合の得点を基準得点にして、各下位因子の平均得点と比較した。「死に対する恐怖」の平均得点は基準得点よりやや高いが、中国高齢者は死に対して、生活に支障がない程度に恐れを感じていると考えられる。比較として、丹下ほか(2013)の調査結果によると、日本高齢者の平均得点は基準得点より低いことが分かった。この差異に関して、日本人のほうが死に近い日常生活を送っていること(例えば街中に墓地があるなど)と関わる可能性がある。「死後の生活の存在への信念」の平均得点が基準得点よりやや低く、丹下ほか(2013)の結果と一致している。これは中国高齢者の中に、死後の世界を信じている者はほぼいないと考えられる。「生を全うさせる意志」の平均得点は基準得点より高かった。これも丹下ほか(2013)の結果と一致しているが、日本の高齢者と比べて、平均得点がやや低かった。また、女性のほうが男性より平均得点が有意に高かった。下位尺度の項目を検討すると、「命より大事なものはない」という項目が女性のほうが有意に高かった( $p < .05$ )ことから、中国の女性の高齢者が男性の高齢者より命を重視していることが分かった。この結果の原因として、社会において、命を危険にさらす職業の中に男性の比率が高いことが考

えられる。「人生に対して死が持つ意味」の平均得点は基準得点よりやや高く、丹下ほか(2013)の結果とほぼ一致している。

また、下位因子間の相関を見ると、丹下ほか(2013)と異なる結果が見られた。先行研究では因子間相関がほぼないことに対して、本研究ではいくつか弱い相関を持っている。まず、「死に対する恐怖」と「生を全うさせる意志」の間に弱い正の相関( $r = .22$ )があった。これに関して、死が怖いほど、死なないためにどうしても生きていきたい気持ちが高くなるという素朴な考えを反映していると考えられる。そして、Van Tongeren & Green(2018)の研究では、意味のある死を考えることで、死の思考がもたらす影響を緩和することができること示唆し、大きい業績を成した死はより受け入れやすいことに解釈をつけた。本研究でも「死に対する恐怖」と「人生に対して死が持つ意味」の間に弱い負の相関( $r = -.24$ )があり、個人の死を超えた意味は死に対する恐怖の緩衝装置になったと考えられる。また、死の回避は中国高齢者の中に普遍的な現象を意味すると考えられる。存在脅威管理理論(Terror Management Theory; Pyszczynski, Solomon, & Greenberg, 1999)は死の思考を意識領域から押し出す「近接的防衛(proximal defenses)」を提示している。死の思考が意識されると、近接的防衛が発動し、「自分が死ぬ」という意識を否定したり、「自分が死なない」ことを合理化したり、関係のない作業で注意を分散したりする。特に死が怖いほど、近接的防衛で死の思考から逃げる。そのため、死が怖いほど、死の思考を回避し、わざと死の意味を肯定したり、否定したりしないことも考えられる。

そして、先行研究では、「死後の生活の存在への信念」と「人生に対して死が持つ意味」の間に弱い正の相関( $r = .35$ )があったことに対して、本研究では弱い負の相関( $r = -.32$ )があった。「死後の生活の存在への信念」と「生を全うさせる

意志」との間にも弱い負の相関 ( $r = -.25$ ) があつた。二つの相関を考えると、強い「来世」や「輪廻」などの信念を持つことにより、「死」が人生に対するただの通過点になると考えられる。死んだとしても「人生」がまだまだ続くため、死の「特殊性」と一回の「生」にこだわる必要がなくなる。関連する研究 (Fan, Gao, Luo, Gelfand, & Han, 2022) は来世に対する信仰は死の不安を低減することで、死の象徴を回避する行動を減少させると示唆している。本研究の結果はある程度で来世に対する信仰が死の不安を低減することの解釈になると考えられる。

叡智知識に関して、とある項目に対して上級水準（難問を解決、アドバイスができる）と自己評価した人の比率は 6.5% ~ 17.3% であつた。先行研究の 10% ~ 20%（楠見, 2018）よりやや低い結果であつたが、先行研究の上級者は 40 歳代後半であり、コホート効果が生じている可能性が考えられる。

#### 4.2 死に対する態度の規定要因

中国高齢者の叡智知識と死に対する態度の関係を検討するために、重回帰分析を行い、モデル 1 で検討した。結果として、叡智知識は「死に対する恐怖」、「生を全うさせる意志」、という 2 つの側面に対して有意な結果がないことが分かつた。「死に対する恐怖」は自分が死ぬ場面を考える際のネガティブな感情を表し、特定の場面に対する嫌な感情（死ぬといかなる体験も出来なくなるのが嫌だなど）と非特定の場面（私は死が怖い）に対する嫌な感情が含まれる。このネガティブな感情は習得的ではなく、生物として、死を回避する本能だと考えられる。「生を全うさせる意志」は如何なる場面においても、自ら命を絶たない気持ちを表す。「死に対する恐怖」と反して、生を求める本能を表すと考えられる。言い換えると、意識のない体はまだ生きていると考えるかどうかの問題であり、「生きる」

に対する執着とも言える。つまり、「死に対する恐怖」、「生を全うさせる意志」、という 2 つの側面は人の「生」と「死」に対する本能であり、叡智知識との関連性が低いと考えられる。

「死後の生活の存在への信念」に対して、「事実知識」が上達するほど、「死後の生活の存在への信念」が強い、「手続き的知識」が上達するほど、「死後の生活の存在への信念」が弱いと評価することが示された。「事実知識」に「人生で起こる重要な出来事に関する知識」という項目がある。何が重要な出来事かに関しては、回答者本人によるものである。つまり、ここでの「事実知識」が世間で通用させる一般的知識ではなく、あくまでも回答者にとって事実だと信じるものを指している可能性があると考えられる。この可能性を踏まえて、死別は人生で起こる重要なイベントであり、死者を弔い、死者に対する思いも当然重要なことだと考えられる。したがって、死後の生活が本当に存在するか否かに関わらず、死者を大事に思うほど、死者に関わることが重要な出来事になり、死後の生活が存在することを信じたい傾向が強まると考えられる。一方で、「手続き的知識」が仕事や生活の中のトラブル解決に関わるものであり、「手続き的知識」が上達するほど、生活が仕事や何らかの出来事によって充実していることが考えられる。生活が充実すれば死者に求める心の依存が少なくなり、死後の生活を信じたい傾向が弱まると考えられる。

「人生に対して死が持つ意味」について、「手続き的知識」が上達するほど、死は人生に対して意味のないと評価し、「相対主義」と「不確定性」が高いほど、死をポジティブな意味があるように評価することが示された。「手続き的知識」は出来事の積み重ねから熟達していくものである。言い換えると、「手続き的知識」が上達するほど、充実した生活を送っていて、死について考える暇がなくなる。その結果、「死の意味」に

ついて考えることができないと考えられる。「相対主義」と「不確定性」は価値観の差異と人生の未知を理解し、受け入れるための叡智知識である。そのため、「相対主義」と「不確定性」が高いほど、死を終焉・喪失以外の肯定的な側面を受け入れやすいと考えられる。

#### 4.3 主観的幸福感の媒介効果

主観的幸福感の媒介効果を検証するために、モデル2を検討した。主観的幸福感の媒介効果が確認されたのは「希望感」を媒介した「手続き的知識」から「人生に対して死が持つ意味」への媒介効果のみであった。つまり、「手続き的知識」は「希望感」を高めることで、「人生に対して死が持つ意味」を肯定的に捉えなくなることが示唆されている。

一方で、この媒介効果は完全媒介ではなく、部分媒介である。死の意味を見出すには死を考える時間が必要であり、その時間が確保できない場合、死の意味を見出せないか、無意味だと捉えることになる。死の回避の側面から考えると、死の思考を抑えるには上述の近接的防御のほか、文化的世界観（社会規範など）と自尊で築く「遠位的防御（distal defenses; Pyszczynski, Solomon, & Greenberg, 1999）」がある。「遠位的防御」は非意識的な行動であるため、中国高齢者の「死に対する恐怖」が高くなくても、日常生活で遠位的防御を行うことが考えられる。社会への関与が高い内向者はそうでない内向者より自尊が高い（Tuovinen, Tang, & Salmela-Aro, 2020）。さらに、集団主義の中国では社会への関与は社会規範に準ずる行動であり、死の思考を抑制すると考えられる。また、手続き的知識は周りの人と良い人間関係を築く方法や生活中的トラブルを解決する方法などの知識が含まれる。そのため、手続き的知識が上達するには多くの社会への関与の経験が必要だと考えられる。そして、死を考える時間や認知リソース

は社会への関与に持っていかれると考えられる。従って、社会への関与の影響で、「手続き的知識」と「人生に対して死が持つ意味」の間に疑似的な直接効果が生じた可能性が考えられる。

存在脅威管理理論は「希望感」の媒介効果の解釈にも適用できる。本研究の「希望感」は人生の面白さ、人生の意味と将来の出来事から構成する。Van Tongeren & Green (2018)の研究では意味のある人生を考えることは「死の思考のアクセシビリティ（Death Thought Accessibility; DTA）」の増加につながると示唆している。つまり、意味のある人生の意識と共に増加するDTAを抑制するために、遠位的防御が増える。遠位的防御はある程度で死を考える認知リソースと時間を使用したと考えられる。一方で、人生の意味は死の回避傾向を減少する研究もある（Brudek & Sekowski, 2021）。ここで注目すべきことは、質問紙で評価する死の回避は対象者が意識できるものであり、DTAは非意識的な概念である。従って、本研究の結果は先行研究と矛盾していないと考えられる。

#### 4.4 まとめ

本研究は中国高齢者の死に対する態度と叡智知識および主観的幸福感との関係性に関する調査であり、結果は死に対する態度、叡智知識および主観的幸福感の関係性は以下のように示した。まず、叡智知識が有意な結果を示した死に対する態度の下位尺度は一部のみであり、本研究の仮説1は部分的に支持された。叡智知識は人生に対して死が持つ意味と「死後の生活の存在への信念」と関わっているが、「死に対する恐怖」、「生を全うさせる意志」とは関わらなかった。そして、主観的幸福感の媒介効果は「手続き的知識—希望感—人生に対して死が持つ意味」のみ確認されたことで、仮説2も部分的に支持されたと考えられる。結論として、叡智知識は死後に関する信念や死の意味などの概念的な部分

に関する評価を予測できる。しかし、生きていくことや世の中から消滅することなど、「死」と「生」の中核の部分に関する評価が予測できない。

現在の中国高齢者たちは中華人民共和国の最も貧しい時代を経験し、自分と子どもが、豊かな生活を送れるように生涯を捧げた。遂に望んでいた生活を手に入れた彼らにとって、「死」を考える時期がまだ来ていないと言えよう。そのため、中国高齢者の叡智知識がどれほど上達しても、死に対する態度との関係性が弱い。一方で、「希望感」の負の媒介効果から、過去の貧困と比べて、今の希望が満ちた生活は中国高齢者が「死」を考えることを阻害するものになっているように見える。

最後に、本研究の限界を述べる。死に対する態度尺度の選択において、中国語版の尺度はなかったため、日本語版の尺度を中国語に翻訳し、使用した。結果として、因子構造が丹下ほか(2013)の研究とほぼ一致であったが、モデルの適合度が低かった。日本と中国の間には似たような文化が多いが、経済や教育などの発展過程が大きな差がある。そのため、日本の高齢者に向けた研究の結果が中国の高齢者に当てはまらない部分があると考えられる。したがって、中国において死に関する研究を発展させるために、中国オリジナルの死に対する態度尺度の作成が必要である。また、ここ数十年間に中国の大卒者が増えつつでありため、同じ高齢者であっても、今の高齢者と比べ、数十年後の高齢者の死に対する態度は変化が生じる可能性が考えられる。そのため、死に関する研究は時代の変遷に応じて、再検討する必要があると考えられる。

#### 4.5 本研究の意義

死に関連する心理学的研究は多く行われているが、その知見はほとんど欧米で見出したものである。特にアメリカなどの宗教が盛んである国で行われた研究や実践が、宗教と大きく関連

しており、宗教信仰が薄い国や地域における適用性が低いと考えられる。そのため、宗教信仰が薄い中国に適した研究や実践がまだ数少ないと言える。一方で、中国における死に関する研究のおおかたは医学や哲学的な視点からの考察であり、心理学的な道はまだ長いと考えられる。したがって、本研究から得られた知見は今後の中国における死に関する心理学的研究、または中国に適した死の教育の礎になるとも考えられる。

- 注1) 本論文は著者が2020年度に立命館大学総合心理学部に提出した卒業論文を再分析し、加筆・修正したものである。
- 注2) 本研究の調査は当時、新型コロナウイルス感染症が流行していない地域で行ったため、パンデミックが死生観に影響する可能性は極めて低いと考えられる。
- 注3) 本研究は研究計画開始から調査できる時期までの時間が短かったため、倫理審査を受けることができなかった。研究倫理を守るために指導教員の指導及びヘルシンキ宣言を採用した。

#### 引用文献

- Ardelt, M. (2008) Wisdom, religiosity, purpose in life, and attitudes toward death. *International Journal of Existential Psychology & Psychotherapy*, 2, 1-10.
- Brudek, P. and Sekowski, M. (2020) Wisdom as the mediator in the relationships between religious meaning system and attitude toward death among older adults. *Death Studies*, 44, 747-758.
- Brudek, P. and Sekowski, M. (2021) Wisdom as the mediator in the relationships between meaning in life and attitude toward death. *OMEGA-Journal of Death and Dying*, 83, 3-32.
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E. and Smith, H. L. (1999) Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125, 276-302.
- Feng, Y., Liu, X. C., Lin, T. W., Lou, B. R., Mou, Q. Q., Ren, J. H. and Chen, J. (2021) Exploring the relationship between spiritual well-being and death anxiety in patients with gynecological cancer: a cross-section study. *BMC Palliat Care*, 20. <https://doi.org/10.1186/s12904-021-00778-3>

- Fan, X., Gao, T., Luo, S., Gelfand, M. J. and Han, S. (2022) Religious Afterlife Beliefs Decrease Behavioral Avoidance of Symbols of Mortality. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 0 (2023年02月23日取得 <https://doi.org/10.1177/01461672221096281>).
- Gerstorf, D., Ram, N., Estabrook, R., Schupp, J., Wagner, G. G. and Lindenberger, U. (2008) Life satisfaction shows terminal decline in old age: Longitudinal evidence from the German Socio-Economic Panel Study. *Developmental Psychology*, 44, 1148-1159.
- Gerstorf, D., Heckhausen, J., Ram, N., Infurna, F. J., Schupp, J. and Wagner, G. G. (2014) Perceived personal control buffers terminal decline in well-being. *Psychology and Aging*, 29, 612-625.
- Gerstorf, D., Hoppmann, C. A., Löckenhoff, C. E., Infurna, F. J., Schupp, J., Wagner, G. G. and Ram, N. (2016) Terminal decline in well-being: The role of social orientation. *Psychology and Aging*, 31, 149-165.
- 国家统计局 (2019) 人口总量平稳增长 人口素质显著提升 新中国成立70周年经济社会发展成就系列报告之二十 (2020年12月13日取得 [http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/201908/t20190822\\_1692898.html](http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/201908/t20190822_1692898.html))
- 橋本京子・子安増生 (2011) 楽観性とポジティブ志向および主観的幸福感の関連について、パーソナリティ研究, 19, 233-244.
- 平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000) 死生観に関する研究：死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証。死の臨床, 23, 71-76.
- 稲木あい・張平平 (2017) 地域高齢者が考える最後の迎え方に関する日中比較研究。保健医療福祉学, 7, 1-6.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003) 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討。心理学研究, 74, 276-281.
- 春日彩花・佐藤真一・Takahashi Masami (2018) 知恵は発達するか—成人後期における知恵の機能的側面と構造的側面の検討—。心理学評論, 61, 384-403.
- 河村諒・中里和弘 (2016) 近親者と死別した高齢者の悲嘆に関連する死生観についての検討。ホスピスケアと在宅ケア, 24, 24-37.
- 隈部知更 (2006) 日本人の死生観に関する心理学的基礎研究—死への態度に影響を及ぼす4要因についての分析—。健康心理学研究, 19, 10-24.
- 楠見孝 (2018) 熟達かとしての叡智—叡智知識尺度の開発と適用—。心理学評論, 61, 251-271.
- 永吉希久子 (著) 照井伸彦・小谷元子・赤間陽二・花輪公雄 (編) (2016) 行動科学の統計学。共立出版。
- 野尻雅美 (2015) 高齢者の孤独死と満足死、「一人」と「ひとり」からの考察。日本健康医学会雑誌, 24, 99-102.
- Schwarz, N. and Bohner, G. (1996) Feelings and their motivational implications: Moods and the action sequence. In P. M. Gollwitzer, and J. A. Bargh (Eds.), *The psychology of action: Linking cognition and motivation to behavior*. New York: Guilford Press. 119-145.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J. and Solomon, S. (1999) A dual-process model of defense against conscious and unconscious death-related thoughts: an extension of terror management theory. *Psychological Review*, 106, 835-845.
- Tuovinen, S., Tang, X. and Salmela-Aro, K. (2020) Introversion and social engagement: scale validation, their interaction, and positive association with self-esteem. *Frontiers in Psychology*, 11 (2022年11月8日取得 <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.590748>).
- 丹下智香子 (1999) 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討。心理学研究, 70, 327-332.
- 丹下智香子・西田裕紀子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史 (2013) 中高年者に適用可能な死に対する態度尺度 (ATDS-A) の構成および信頼性・妥当性の検討。日本老年医学会雑誌, 50, 88-95.
- 丹下智香子・西田裕紀子・富田真紀子・大塚礼・安藤富士子・下方浩史 (2016) 成人中・後期における「死に対する態度」の縦断的研究。発達心理学研究, 27, 232-242.
- Van Tongeren, D. R. and Green, J. D. (2018) Meaning and death - thought accessibility. *British Journal of Social Psychology*, 57, 230-239.

(受稿日：2021. 12. 3)

(受理日：2023. 2. 28)

Original Article

The influence of wisdom on older Chinese adults' attitudes toward death: Discussing the mediator of subjective well-being

LI Ziming

(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

---

This study tested the following hypotheses: 1) Older Chinese adults' attitudes toward death are related to wisdom and subjective well-being; 2) subjective well-being mediates between wisdom and attitudes toward death. A questionnaire was conducted with 139 older adults living in Guangdong Province, China. The questions covered such topics as attitudes toward death, wisdom, and subjective well-being. The subsequent factor analysis results showed that older Chinese adults' factor structure was almost identical to older Japanese adults' attitudes toward death. A multiple regression analysis suggested that wisdom was a determinant of "belief in the existence of life after death" and "the meaning of death for life." Subjective well-being showed a mediating effect (10%) between "procedural knowledge" and "the meaning of death for life." These results partially supported the first hypothesis. Moreover, wisdom was found to be related to "the meaning of death for life" and "belief in the existence of life after death" but not to "fear of death," "willingness to live a full life," or "the death of body and spirit." The mediating effect of subjective well-being was only "procedural knowledge-sense of hope-meaning of death for life," which partially supported the second hypothesis.

**Key Words** : attitudes toward death, wisdom, subjective well-being, older Chinese adults  
*RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.46, 31-45, 2023.*

---

